学習院大学哲学会『哲学会誌』第３５号、２０１１年、６７－７８頁

（『哲学会誌』に掲載されているものは本論文の縮約版）

ベルクソン研究――自我は自由であり得るか

Étude sur Bergson：Le Moi peut-il être libre?

冨増寛和

TOMIMASU, Hirokazu

目次

目次・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１頁
凡例・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２頁
序章　　自我に自由はあるのか・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３頁
第一章　　自我の自由に関するベルクソンの主張
　第一節　　時間と空間・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・７頁
　第二節　　自我の自由・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１１頁
第二章　　ベルクソンの主張の問題点
　第一節　　自我を自由に見える状態にしているもの・・・・１９頁
　第二節　　自我は本当に表現され得ないのか・・・・・・・２２頁
第三章　　自我は自由と言えるのか
　第一節　　自我は自由ではない・・・・・・・・・・・・・・・２４頁
　第二節　　自我の不自由と決定論・・・・・・・・・・・・・・２８頁
結語・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３０頁
参考文献表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３３頁
註・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３４頁

凡例

- 引用箇所や補足箇所には小さな算用数字を付し、註にて詳細を示す。
- 原著の訳は、参考文献表に記載された訳本を参照しつつ、本論文の筆者が訳出したものである。
- 原著におけるイタリック部分は、本論文の訳では傍点をもって表現する。
- 参考文献表には、引用箇所に用いた原著と訳本のほか、論文執筆にあたって参考としたものも含まれる。
- １頁は４０字×３０行、すなわち１２００字である。

序章　自我に自由はあるのか

あけすけに打ちひらけた蒼穹に巍々(ぎぎ)たる入道雲が立ち昇るのを目にすれば、私は蝉時雨の降りしきる京都の山寺を汗もしとどに巡り歩きたいという願望を禁じ得なくなる。ところがそのような折にはサーフボードを片手に浜辺に繰り出したいと感じる者もいるであろうし、出不精の者ならばクーラーの効いた快適な部屋から敢えて出たくはないと考えるかもしれない。――この様に我々が何かしらの状態を実現しようと意志した際、或いは何かしらの状態を実現する事が現実的には出来ないにせよ、その何かしらの状態を実現したいという願望を己のうちに懐(いだ)いた際、その意志や願望は個々人によってまちまちであるために、それら意志や願望は個々人固有の生産物であり所有物であるとするのが一般的である。そのとき自我は確かに確かに見えるのだ――あたかも何者からも束縛されず可能性の大空を意のままに飛び巡ることが出来る鳳凰であるかのように。

ところが次の様な場合には、必ずしも自我が自由に意志や願望を懐けているとは思われない。例えば我々が意識も霞む程の猛烈な空腹に苛まれたとき。斯くの如き折には胃袋を食べ物で我武者羅に満たしたいと考えるのは誰しの人も同じであろう。蕭然たる孤独に晒されたとき人肌に恋焦がれるのも誰彼なしにまた然り。反対に嘔吐を催すほどの満腹感に支配されているならば好物であろうが寸毫も喉を通したくはないであろうし、巷の喧騒に精神を打ち拉がれておれば吉田兼好さながら独りになりたいと願ったとしても無理はない。――この様な事例を閲すれば、先程とは打って変わって自我が手枷足枷に絆(ほだ)されて、奴隷さながら意志させられている様にすら思われてくる。

尤も、堪え難いほどの満腹であってもなお食べ続けようと意志する事は可能だろうし、壮絶な孤独であってもなお孤独のままで堪え忍ぼうと意志する事は可能だろう。しかしそれでも自我が自由に意志しているとは限らない。表面的には自ら意志を選択し決定しているように思われていても、その実、自分以外の何者かの手によってそのように意志するよう巧みに仕向けられている可能性も考えられるのだから。――ちょうど商売上手の服屋に言葉巧みに機嫌をくすぐられ、似合いもしない服を似合っているかの様に錯覚させられた挙句、趣味でもない服をすっかり買う気にさせられてしまう事が往々にしてある様に。

人間の自我もしくはその意志が自由であるか否かという問題に関する斯くの如き議論は古くはアリストテレスの時代にまで遡り、中世以降トマス・ホッブズやバールーフ・デ・スピノザら数多の哲学者らによって一入本格的に深められてきた。人間の自由とは「しようという意志、願望または意向を持つものごとを行うにあたり、妨げるものを何も見出さない、ということにある（which consisteth in this, that he finds no stop, in doing what he has the will, desire, or inclination to doe）」[1]というホッブズの定義については諸公に際立った異論は見られない。即ち人間の自我が何かしらを意志したり意欲したりしようとする際に、その意志や意欲を何者からも妨げられることなく自ら選択できる状態であるならば、自我は自由であると言えるとするのが我々の共通認識だとしてよいだろう。ところが自我の自由に纏わる幾らかの重大な事柄が禍してか、自由の肯定派と否定派の打々発止の論争は現在においてもなお収束してはいない。そしてその自我の自由に纏わる重大な事柄の最たるものとは、中世においては神という観念であった。

例えばキリスト教のカルヴァン主義者らは神の全知全能を根拠として、人間の行動は全て予め定められており変更不可能であるとする予定説を唱えるに至る。換言すれば全知全能の神は我々人間の意志を予てよりお見通しである為に、人間が己自身で意志したように思われても厳密には己自身で意志した――すなわち選択したとは言えないと彼らは主張したいのである。これに反して他の宗派のキリスト教徒らは、聖書の記述を根拠として神は人間に自由な意志を与えていると訴える。我々人間が善悪を自由に選択できないのであるならば、成程確かに生前の行いに応じて天国や地獄に人間を振り分けるという神の裁きは無意味になってしまうだろう。――ともあれ何れの主張も正体の定かでない神の存在を盲目的に前提としている段階で、およそ全うな論証を経ているとは言い難い。

さて中世においては自我の自由に纏わる重大な事柄であった神という観念も、近現代にはじわりじわりと信頼の座を占奪していった科学に取って代わられてゆく。力学をもって物理世界の未来を予測できると考えた１８世紀の数学者ピエール・シモン・ラプラスに代表される様に、爾後科学者らは諸々の現象の観察とその分析によって世界が原因と結果の関連法則に――即ち因果律に統べられているらしい事を白日の下に曝してゆき、その法則を用いれば未来を確定することが出来るという事を弥日異（いやひけ）に例示していったわけである。とどのつまり科学を用いて未来を確定することが出来るのであるのだから、人間もまた決められた法則に操られて意志を選択しているのではないかと考えられるのである。予言さ

れた時刻に予言された場所でそのものずばりの日食が出現したり、人体がある病状をきたした場合に予め定められた処置をすれば見事に病状が回復したりという具合に、今日では常日頃から我々の認識と合致するかたちで科学が予言をのべつ幕なしに的中させている為に、確かに我々は世界が原因と結果によって構成されていると納得させられているし、確かに我々は多かれ少なかれ未来は予測できるものと納得させられている。されど科学とは飽くまで現象の観測を出発点として、原因と結果という出来事と出来事の関連性のようなものを暫定的に仮定しているに過ぎないという事実を、我々はゆめゆめ忘れるべきではない。今日まで確実であると信じられてきた科学法則に反する現象が明日観測されない保証はどこにも無く、今日まで関連性があると信じられてきた原因と結果が全く関連性の無い事柄同士だったと暴かれない保証はどこにも無いのだから。事実科学はそのような予定外の現象を新たに観測する度に、修正に次ぐ修正を余儀なくされてきた不完全なものだろう。糅てて加えて科学の出発点である現象観測における人間の認識が確実であるという保証も一切ないのだから、尚のこと科学的証明は信頼に足るものとは呼び得ない。

――さて、ここで我々の自我が自由に意志しているか否か、あるいは自由に意志し得るか否かという本題に戻りたい。結局のところ自我の自由の是非を巡るこれまでの議論は、不確かな神や不確かな科学ないし因果律などといった観念に絆されて、やはり多くの場合全うな論証過程を経られてこなかったように私のためには思われるのである。そこで私は自我の自由が成立し得るか否かを自分なりに考えてみようと心に決めて、かつて暫くの間この難問に昼夜を分かたず取り組んだことがある。そして熟考に次ぐ熟考の末に、容易には疑いをさしはさみ得ないと思われる程度の結論を編み上げることが出来た。その結論は次の一文にありのまま集約される。

> 「何かしらの意志が自我のうちに宿される時、その意志を自我のうちに宿らせたものが、未だそれを宿していない自我それ自体である筈がない」

成すべき証明と提示されるべき結論が最も理解しやすい形で悉く表現されているために、ともするとこれ以上に説明を加える必要はないかも知れない。論理とその対象との距離がなく直接的であるという意味で、私のためにはデカルトのコギトと同程度かそれ以上にこの結論は明白であると思われる。意志を自我に宿すものが何であれ兎にも角にも、自我が

何かしらの意志を持つ前には当然まだ自我はその意志を持っていないので、その意志は少なくとも自我以外から齎されることになり、自我は自我自身で自由に意志を持つ権利を端から持ち得ないという件の一文のみせる論理構造は、鋭利に加工された花崗岩が緻密に積み上げられた城砦の石垣の如く堅牢で隙がなく破り難い。それゆえ結論であると同時に証明であるこの極めてエレガントな隻句によって、基本的には自我に自由がない事は証明できると考えてよいだろうと私のためには思われるのである。

しかるにこのさい私の証明に率先して舌鋒鋭く異議を申し立ててくる者がいるとするならば――それはベルクソンに違いない。何となればベルクソンこそは自我の自由の熱心な庇護者の最右翼であるし、とりわけ自我の自由に関して扱われている彼の主著『意識に直接与えられたものについての試論』（Henri Bergson, *Essai sur les données immédiates de la conscience*,1889）における彼の独特な考え方は確かに、金城湯池（きんじょうとうち）の私の証明をともすると脅かしかねない力を秘めているからである。そして何故ベルクソンの発想が私の証明を脅かしかねないかと言うと、彼は自我そのものを表現したり分析したりすることを厳に禁ずるからである。それでは先ずベルクソンの自我に対する考え方を前記の『試論』に即して汲み取ったうえで、ベルクソンが自我そのものを表現したり分析したりすることを禁ずる理由を詳らかにしてみよう。更にそこからベルクソンがどのように自我の自由を擁護してゆくのかを検証してみようではないか。そして自我が意志や願望を自ら選択する力を秘めているか否かを突き止めることを、本論文の最終目的としたい。

第一章　ベルクソンの主張

第一節　時間と空間

日中戦争において中国国民党軍を率いて祖国の防衛を指揮した蒋介石は、圧倒的な軍事力を掲げて迫り来る日本軍に対抗する為に用いた戦略を「空間をもって時間にかえる」[2]戦略と呼んだ。これは広大な中国大陸という空間を遺憾なく活用して奥へ奥へと逃げ続けることで時間を稼ぎ、そのあいだに国際社会の加勢を取り付けるというものである。そしてやきもきしつつも蒋介石は作戦通りに空間をもって時間に変えて、結果的に祖国を死守することに成功したのであるが――この「空間をもって時間にかえる」という響きはともすると、耳聡いベルクソンの気分を多少なりとも害するものであるかも知れない。何故ならばベルクソンにとって真の空間と真の時間は全くの別物であり、真の時間を真の空間に変えることも、反対に真の空間を真の時間に変えることも、厳密には不可能だと彼は考えているからである。無論我々は「空間をもって時間にかえる」とは飽くまで比喩的な表現であって、実際に空間が時間に変化したり時間が空間に変化したりし得るなどとは端から毛頭考えていない。では時間と空間という観念を扱うに際してベルクソンは一体我々に何を忠告したいと言うのだろう。この際ベルクソンの言わんとする考えが我々の一般的な価値観を少し揺さぶってくる類のものであることに留意されたい。彼自身も「信じがたい困難を覚える（nous éprouvons une incroyable difficulté）」[3]とあけすけに吐露している通り、我々に己の考えを伝える表現に梃摺（てこず）っている感もない事はないが、ひとまず時間と空間に関する彼の考え方を比較的端的に含んだ部分を紹介しよう。

> 「さて、我々が時間について語る時、たいていの場合、我々の意識の状態が整列し、空間の中のようなところに併置され、明瞭な多様性をうまく作れるようにする均質な環境のことを考えていることに注意しよう。我々の心的諸状態の多様性におけるこのように理解された時間は、強さがそれら諸状態のうちの或る種のものにあるということ、つまり真の持続とは完全に異なるサインであり記号ではないだろうか

（Or remarquons que, lorsque nous parlons du temps, nous pensons le plus souvent à un milieu homogène où nos faits de conscience s'alignent, se juxtaposent comme dans l'espace, et réussissent à former une multiplicité distincte. Le temps ainsi compris ne serait-il pas à la multiplicité de nos états psychiques ce que l'intensité est à certains d'entre eux, un signe, un symbole, absolument distinct de la vraie durée?）」[4]

ベルクソン独特の用語を咀嚼してわかりやすく要約するならば――我々は動きなどの進行しつつある時間的なものについて語ろうとする時には空間のような観念内に時間軸を広げて、時間軸の各点にその当時その当時の印象をあたかも写真のような固定化された記号として並べて表現しようとするが、実際には進行しつつある時間というものは持続的に流れていてこそ真に進行しつつある時間と呼び得るものであるのだから、時間軸という静止した空間の上の固定的な表現では、進行しつつある時間の持続的な流れそのものまでは表現できてはいない、という具合になるだろう。静止した印象を並べる事で動きという進行しつつある時間的なものを表現しようとする我々の思考のこうした傾向を「映画的（cinématographique）」[5]とベルクソンが呼ぶのは、それが静止画を羅列することで進行しつつある動きを表現しようとする映画のメカニズムさながらだからである。

そもそも動きという進行しつつある時間的なもの――持続しているもの――は実際には河の如く滔々（とうとう）と切れ目なく流れている筈なのに、その流れを映画のフィルムの静止画のように細切れに分割して表現していては、その細切れの静止画と静止画との間にどうしても埋められない空隙が生じてしまう。休みなく無段階に進行し続けている筈の本来の動きを、休み休みの段階的な描写しかできない映画で表現しようとすることで、オリジナルの「本当の運動（mouvement réel）」を「不器用な模造品（imitation maladroite）」[6]へと劣化させてしまっていると言えるのである。一秒を２４コマに分割する映画フィルムであろうとも、一秒を１２０コマで表現する最新鋭のハイビジョンであろうとも、それが一刹那を切り取って空間に表した静止画の羅列でしかない以上、静止画と静止画との間に如何とも埋めがたい空隙が生じてしまうのは当然のこと。百歩譲って動きという進行しつつある時間的なものを空間的に表現しようとする静止画が無数に存在し、即ち静止画と静止画との間に何の空隙も存在しないという空想上の特殊な状況が実現できたと仮定したとしても、進行しつつある時間という持続的な流れがなければそこにはただ無数の静止画の群れ

があるばかり。「どれだけ多くの停止をもってしても動きを作るわけにはいかない（Avec des arrêts, si nombreux soient-ils, on ne fera jamais de la mobilité）」[7]のである。なるほど確かにこの様な体たらくでは動きなどの進行しつつある時間的なものを真に空間で表現できるなどとは到底言えない。折に触れてベルクソンがとりあげる音楽を例に挙げて考えてみてもまた然り。

> 「メロディを、眼を閉じながら、それしか考えず、あなたがたがこうして共に保存したところの音符を、そしてそのさい同時のものとなることを受け入れ、時間における流動的連続性を断念して、空間の中で固定したところの音符を、想像上の紙や鍵盤の上に並置するのをやめながら聴くがよい。あなたがたはあなたがたが純粋持続の中に置き替えたメロディやメロディの部分が分割されておらず、不可分であることを再発見するだろう（Écoutez la mélodie en fermant les yeux, en ne pensant qu'à elle, en ne juxtaposant plus sur un papier ou sur un clavier imaginaires les notes que vous conserviez ainsi l'une pour l'autre, qui acceptaient alors de devenir simultanées et renonçaient à leur continuité de fluidité dans le temps pour se congeler dans l'espace ： vous retrouverez indivisée, indivisible, la mélodie ou la portion de mélodie que vous aurez replacée dans la durée pure）」[8]

メロディという進行しつつある時間的なもの――持続しているもの――を楽譜という空間的なものとしてひとまず表現する事は出来るように思われるが、確かに楽譜という静止した記号それだけではメロディの持つ持続的な流れそのものまでは表現できない。言わずもがな、本来のメロディとは時間のうちに流れつつある持続的なものであるが、楽譜の音符とは空間のうちに静止している固定的なものだからである。読譜（ソルフェージュ）の心得のある人間がこの文章の読者であれば、自分なら楽譜を眺めるだけでもメロディを頭の中で嚠喨（りゅうりょう）と奏でることができるので、空間だけでもメロディの流れを表現できているではないか等とひょっとしたら反論してくるかも知れない。しかしそのメロディを頭の中で再現するという行為のためには、やはり進行しつつある時間という持続的な流れがどうしても必要にならざるを得ないのだ。更には仮に進行しつつある時間を用いて楽譜に記述されている音符の群れを演奏する行為を特別に諾（うべな）うとしても、その再現されたメロディは本来のメロデ

ィと細部に至るまで完全に等しいものだろうか。即ち我々がメロディを創作して楽譜に音符を認めたその時のメロディと、認められた音符の群れを演奏することで再現されたメロディは、抑揚や強弱の機微に至るまで悉皆等しいものだろうか。――断じて断じてそうではない。メロディという流れは寸毫の途切れもなく綿々と連なっているものであって、どれだけ耳を欹てても抑揚や強弱の機微には金輪際限界がないのだから。楽譜という空間上に本来のメロディの抑揚や強弱の機微をどれだけ微に入り細を穿って記述したとしても、抑揚や強弱の際限なき機微を悉く記述し尽くす事など神といえども不可能なのである。

それゆえ進行しつつある時間的なものそれ自体を真に表現しようとするならば、我々は進行しつつある時間という持続的な流れそのものに直接身を委ねるほかない。しかしてこのさい持続的な流れそのものに直接身を委ねなければならないので、厳密には今現在というこのリアルタイムの一刹那についてしか我々は表現する権利がないという事になる。しかるにその今現在というリアルタイムの一刹那について表現しようとした時には、持続的な流れそのものに身を委ねて絶えず進行しつつある自分は既にその一刹那よりも僅かであろうが未来に進んでしまっている為に、結局のところ持続的な流れそのものを表現することなど不可能なのであるという事実に我々は辿り着かざるを得ない。流れつつある持続的なものを空間的なもので真に表現することはできない[9]――ベルクソンにとって最も疑い得ないこの確信は、今や我々にとってもまた同じだけ疑い得ない確信となったように思われる。

――とどのつまり時間的な観念を扱うに際してベルクソンが我々に是が非でも忠告したいのは、進行しつつある時間的なものそれ自体を空間的な表現に真に置き換えることは不可能なので、進行しつつある時間的なものそれ自体を真に捉えようとするなら持続的な流れそのものに身を委ねてありのままに感じるしかない、という事に他ならない。そしてこの持続的な流れそのものに身を委ねてありのままに感じる行為こそ、ベルクソンの言う直観なのである。

> 「絶対は直観のうちにしか与えられず、その他の全ては分析の領域に属することになる。我々がここで直観と呼ぶのは同感のことであり、独特な、したがって表現できないところのあるものと一致するために、その同感によって対象の内部に身を置く（Il suit de là qu’un absolu ne saurait être donné que dans une *intuition*,

tandis que tout le reste relève de l'*analyse*. Nous appelons ici intuition la *sympathie* par laquelle on se transporte à l'intérieur d'un objet pour coïncider avec ce qu'il a d'unique et par conséquent d'inexprimable)」[10]

表現できないところのあるものと一致する——即ち表現できないものである流れつつある持続的なものと一致することにより、表現できないものを表現できない代わりにありのまま感じ果(おお)せる。表現できないものの本性を真に捉えるためには、諸手(もろて)を挙げて表現することを断念したうえでこの様に直観するしかない。

そしてこの忠告にみられる持続しているものに対する直観的態度こそ、まさに自我そのものの認識において用いられねばならないとベルクソンは展開したいのである。何故ならば自我という意識状態もまた——いや、むしろ自我という意識状態こそが、我々が常に体感している通り今現在というこの持続的な流れそのもののうちにあるはずなのだから。持続的な流れそのもののうちにある自我という意識状態を、持続的な流れを持たない表現というものに真に置き換えることなど不可能なのだから。言わずもがなそうである自我それ自体を真に捉えようとするならば、持続的な流れそのもののうちにある自我に身を委ねてありのままに感じるしかない。

第二節　自我の自由

さてここで息継ぎがてら、これまでに我々が確認してきた事柄をざっと俯瞰しておきたい。先ずもってベルクソンが提示したのは、時間を空間で真に表現することは出来ないという発想である。すなわち進行しつつある時間的なもの——持続しているもの——は、静止したものである空間的な表現には真に置き換えられないと彼は主張したのであった。運動や進行という持続的な作用は静止した表現とは根本的に異なるものであり、運動や進行を表現しようとして言葉なり写真なりといった静止物をどれだけ多く並べてみせたところで、静止物それ自体のみからは運動や進行といった持続的な作用までは出現し得ないからである。「動的で不可分の進行のなか（dans le progrès dynamique et indivisé)」[11]に切れ目を入れて表現してしまっては「甚大な変質（altération profonde)」[12]を蒙ってしまう——持続的な作用の本質を損なわせてしまう甚大な変質を。それゆえ進行しつつある時

間的なもの――持続しているもの――を真に表現することは不可能となる。可能であるのは捉えることのみ。そして進行しつつある時間的なもの――持続しているもの――を真に捉える為には、我々は持続的な流れそのものに身を委ねてありのままに感じる――直観する――しかない。丁度我々が流れつつあるメロディに虚心坦懐に身を委ねて、そのメロディをそのメロディそのままにとっくりと把握する時のように。

以上がこれまでに我々が確認してきたおおよその事柄である。躍（きびす）を返して本論文の目的が「自我が意志や願望を自ら選択する力を秘めているか否かを突き止めること」[13]であるのを想起すれば、ややもすると脈絡を逸しているとも思われかねない検証作業ではあったが、第一章第一節の末尾で少しく予告したように、一連の検証作業で得られた諸事実をもってベルクソンは自我の問題へと敷衍してゆくので心配には及ばない。むしろ前述の諸事実から自我の自由を導いてゆく今後の過程こそが本題であり、ベルクソン哲学の躍如とした真骨頂でもあるだろう。――では我々の確認してきた諸事実から自我の自由に関するベルクソンの主張を導いてゆきたいが、先ずはその為の理想的な糸口となるであろう文言から紹介したい。

> 「あるのはただ我々の内的生活の連続的なメロディー――我々の意識的な実在の始めから終わりまで不可分に続いており爾後も続いてゆくだろうメロディーである。われわれの人格はまさにそれなのだ（Il y a simplement la mélodie continue de notre vie intérieure, ――mélodie qui se poursuit et se poursuivra indivisible, du commencement à la fin de notre existence consciente. Notre personnalité est cela même）」[14]

これまでにベルクソンの発想を検証してきた我々には、この文言を理解するために殊更補足を加えてもらう必要などはないかも知れない。言わずもがな我々の人格すなわち我々の自我もまた、メロディと同様に持続しつつあると彼は言いたい訳である。確かに我々が常にありのまま直観し体感している通り、自我は今現在というこの持続的な流れそのものののうちにあると言うほかない。いや、流れつつあるものを表現することを禁ずるベルクソンの考えに厳密に遵うならば、「自我は今現在というこの持続的な流れそのものののうちにある」という静止した隻句（せっく）で、持続しているものである自我を表現する事もまたご法度で

あるのだろうが。兎にも角にも我々は、各自の意識状態に身を委ねて意識状態そのものを直観することにより、意識状態という自我の本質がメロディの本質と同様に持続的に流れつつあるのだと把握しさえすればそれでよい。そうしさえすれば自我が持続的に流れつつあるのだという事実を、表現できないまでも確認することはできるのだから。

しかして自我が持続的に流れつつあるのだという事実から、図らずも自我は真には表現され得ないものであるという事実も同時に導けた。「無限に動的（infiniment mobile）」である真の自我を静止したものである言葉が捉えようとすると、必ず「その動性を固定して（fixer la mobilité）」しまい自我の本質を損なわせてしまうことになる。[15]持続しているものに関して一再ならず検証してきた我々にとってはもはや、「進行しつつある時間的なもの――持続しているもの――を真に表現することは不可能」だという前述の帰結を回想するだけで、持続している自我の本質が真には表現され得ない事を納得するには十分だろう。

ところで「表現できない」という状況はまた「分析できない」という状況をも導く事実をこのさい敢えて確認しておきたい。「分析は、対象を既知の要素に、つまりその対象とほかの物とに共通な要素に戻す作用（l'analyse est l'opération qui ramène l'objet à des éléments déjà connus, c'est-à-dire communs à cet objet et à d'autres）」であり、分析することは結局のところ「一つの物を機能においてその物でないものと照らし合わせて表現すること（exprimer une chose en fonction de ce qui n'est pas elle）」になってしまうのだから。[16]よりシンプルに言うならば、何かしらを分析する為には、分析対象であるその何かしら自体がまず表現されていない訳にはいかないから、と換言できるだろう。とどのつまり自我が真に表現され得ないものである以上、自我はまた真に分析され得ないものでもあると言えるのである。

――さて漸く我々は、自我は真に表現され得ないものであると同時に、真に分析され得ないものでもあるという事実を導出するに至った。翻（ひるがえ）って本論文の序章の末尾に立ち戻るなら、「ベルクソンが自我そのものを表現したり分析したりすることを禁ずる理由」[17]を詳らかにすることもまた、本論文の重要な目的の一つであった事を確認できるだろう。

そこで我々は念には念を入れて改めて確認したい――ベルクソンが自我を表現したり分析したりすることを禁ずる理由を。先ずもって自我は滔々と流れる河のように持続しつつあるものであり、持続しつつあるものは静止したものである記号では真に表現され得ないものである為に、自我は真には表現され得ないのであった。そして何かしらを分析する為

には、分析対象であるその何かしら自体がまず表現されていない訳にはいかない為に、真に表現され得ないものである自我は真に分析されることもまた出来なくなる。そして「それでも分析しようと固執すれば、知らぬ間に進行を物に、持続を拡がりに変えてしまう（si l'on s'obstine à analyser quand même, on transforme inconsciemment le progrès en chose, et la durée en étendue）」ことになり、「成されつつある事実がすでに成し遂げられた事実に取り替えられてしまう（à la place du fait s'accomplissant on met le fait accompli）」[18]ことになる。そのとき表現されたり分析されたりした自我は「甚大な変質（altération profonde）」[19]を蒙って、本来の自我とは似ても似つかぬ別物に転じてしまう。さればこそベルクソンは自我そのものを表現したり分析したりすることを厳に禁じたわけである。

ベルクソンがここまで依怙地になって自我そのものを表現したり分析したりすることを禁じたがるのは何故だろうか。ありのままに揣摩するに、自我の分析を諾(うべな)えば自我の未来の様態の予測が可能になる余地が生じかねないからだろう。自我の分析によるある思考実験を展開した際に「自由についてのこうした実に機械論的な考え方が、自然な理論により、最も頑強な決定論に到達することは、容易に分かる（il est facile de voir que cette conception véritablement mécaniste de la liberté aboutit, par une logique naturelle, au plus inflexible déterminisme）」[20]と告白している事からも、分析を許せば自我の未来の様態が予測され得る事をベルクソンが問題視している事は疑い得ない。自我の未来の様態が予測可能であれば――即ち自我の未来の様態が予め宿命づけられているのであれば、自我が自由に意志する余地は必然的に存在しない事になってしまうので、自我の自由の庇護者であるベルクソンとしてはこれほど看過できない懸念はないだろう。ベルクソンの懐(いだ)くこの懸念を容易く了解する為には、物理学や解剖学などに用いられる科学的分析過程を思い浮かべるだけで済む。本論文の序章で触れた通り、科学者らは諸々の現象の観察とその仔細な分析によって、世界が原因と結果の関連法則に――即ち因果律に統べられているらしい事を白日の下に曝してゆき、その法則を用いれば未来を確定することが出来るという図式を今日(こんにち)に至るまで尤もらしく続々と例示してきた。あたかも因果律と科学的分析さえ用いれば、この世の全てのものの未来を悉皆予見できるとでも言うかのように。

「ある一定の瞬間における人間の身体組織の分子や原子の位置と、その身体組織に

影響し得る宇宙の全ての原子の位置ならびに運動を知っているような数学者は、この身体組織の属する人間の過去、現在、未来の行動を、さながら天文現象を予測するかのように、絶対確実な精密さで計算するだろう（le mathématicien qui connaîtrait la position des molécules ou atomes d'un organisme humain à un moment donné, ainsi que la position et le mouvement de tous les atomes de l'univers capables de l'influencer, calculerait avec une précision infaillible les actions passées, présentes et futures de la personne à qui cet organisme appartient, comme on prédit un phénomène astronomique）」[21]

ここで用いられている「身体組織」という語句は、因果律を信奉する科学者にとって自我を紡ぎ出すものであろうところの「意識組織」に置き換えられてもおおよそ差し支えない。兎にも角にも自我を構成するように思われるところの身体組織なり意識組織なりが分析され得るものであり、またそれらが因果律という原因と結果の関連性に則して動いているのであるならば、確かにそのとき自我の未来は予測計算され得ることになり、自我の自由が否定される余地が生じかねない事になってしまう。さればこそベルクソンは自我を分析する行為を頑なに禁止して、自我の未来が予測計算される可能性を予め一蹴しようとしたものと思われる。

加えてベルクソンは因果律の正当性を破壊することにも吝かでない。当然ながら因果律がなければ何事も予測され得ず、自我もまた予測され得ないものとなるからである。因果律を否定するためには本論文の序章で論じたように、今日まで確実であると信じられてきた科学法則に反する現象が明日観測されない保証はどこにも無く、今日まで関連性があると信じられてきた原因と結果が全く関連性の無い事柄同士だったと暴かれない保証はどこにも無いという事実を提示するだけで事足りるだろう。

「因果性の原理は、それが将来を現在に関係づける限りにおいて、決して必然的原理という形式をとらないだろう。なぜなら、現実の時間の相次ぐ諸瞬間は互いに連動しておらず、いかなる論理的努力をもってしても、あったたものはあるだろうとか、あり続けるだろうとか、同じ先行諸条件は常に同じ諸帰結を呼び寄せるだろうとかと証明するには至らないだろうからである（le principe de causalité, en tant qu'il lierait l'avenir au présent, ne prendrait jamais la forme d'un principe

nécessaire ; car les moments successifs du temps réel ne sont pas solidaires les uns des autres, et aucun effort logique n'aboutira à prouver que ce qui a été sera ou continuera d'être, que les mêmes antécédents appelleront toujours des conséquents identiques)」[22]

尤も、因果律を否定したり自我の分析を禁じたりしたからといって、それだけで必然的に自我の自由を肯定することになるわけではない。自我を分析するという手法により「現在まで自由について作られてきた全く否定的な観念（l'idée purement négative que nous nous en étions faite jusqu'à présent)」[23]を、ベルクソンは議論の土俵から飽くまで駆逐しようとしただけなのである。

では自我そのものを表現したり分析したりすることが厳に禁じられたいま、自我が自由なものであるか否かを知る為に我々に残された手段は何であろう。繰り返しに次ぐ繰り返しになるが、自我が今現在というこの持続的な流れそのものの中にある以上、我々にとって可能であるのは自我を捉えることのみ。そして進行しつつある持続的な自我を真に捉える為には、我々は持続的な流れそのものに身を委ねてありのままに感じる——直観する——しかないのである。しかしそうしさえすれば、「自我は、その直接的確認において絶対確実に自分を自由だと感じ、そう言明する（Le moi, infaillible dans ses constatations immédiates, se sent libre et le déclare)」[24]とベルクソンは鼻息荒く強調する。自我を直観すれば自我が自由であると感じられる根拠は『試論』においてよりもむしろ、オックスフォード大学にて披露されたベルクソンの講演において端的に整理されているので、先ずは後者から該当部分を引用して閲してみよう。

「自由意志に関する論争は、必然的な決定の観念があらゆる種類の意味を失う具体的な持続のうちに我々自身が実際にいるということに気づけば終結する。そこでは過去が現在と一体になり、現在とともに——たとえそこに付け加わるという事実だけによるとしても——絶えず絶対的に新しいものを創造しているのだから（Les discussions relatives au libre arbitre prendraient fin si nous nous apercevions nous-mêmes là où nous sommes réellement, dans une durée concrète où l'idée de détermination nécessaire perd toute espèce de signification, puisque le passé y fait corps avec le présent et crée sans cesse avec lui——ne fût-ce que par le

fait de s'y ajouter――quelque chose d'absolument nouveau）」[25]

進行しつつある今現在という持続的なものに関して再三にわたって検証してきた我々は、持続しつつあるものを過去や現在という時間軸の上に表現できない事はとうに了解済みなので、持続しつつある自我を直観すれば「過去が現在と一体」になるという発想には特段眉を顰（ひそ）める必要はない。そこには進行しつつある今現在がひとつあるばかりなのだから。そして進行しつつある今現在しかないのであるならば、当然ながらそこには時間的に前もなければ後ろもない。それゆえ自我とその創造物である自我自身の行為は同時的であり、すなわち自我と自我の行為は同化するはずだとベルクソンは発展させたがっている訳なのである。そしてもし自我と自我の行為が同化しているとするならば、自我の行為は自我によってのみ創造されているはずだとベルクソンは主張したいのである。自我の行為が自我によってのみ創造されているとするならば、確かにそのとき我々は自我が自由に行為していると言わざるを得なくなるのだから。

「実際、自由な決断は心全体から出る。そして行為は、それが関係する動的系列が根底的自我と同化する傾向があればあるほど、その分だけより自由になるだろう（C'est de l'âme entière, en effet, que la décision libre émane ; et l'acte sera d'autant plus libre que la série dynamique à laquelle il se rattache tendra davantage à s'identifier avec le moi fondamental）」[26]

「要するに、我々の行為が我々の人格全体から出るとき、我々の行為が人格全体を表現するとき、我々の行為が作品と芸術家との間に時に見られるような形容しがたい類似性を人格全体と持つとき、我々は自由である（Bref, nous sommes libres quand nos actes émanent de notre personnalité entière, quand ils l'expriment, quand ils ont avec elle cette indéfinissable ressemblance qu'on trouve parfois entre l'œuvre et l'artiste）」[27]

「一言で言えば、もし自我から、そして自我のみから出るあらゆる行為を自由と呼ぶのが適切ならば、我々の人格の刻印を帯びた行為は真に自由である（En un mot, si l'on convient d'appeler libre tout acte qui émane du moi, et du moi seulement,

l'acte qui porte la marque de notre personne est véritablement libre)」[28]

心全体や人格全体――すなわち持続的な流れそのものの内にある自我――から自我の行為が創造されることを、上記の三つの引用のいずれもが強調しているのが了解いただけるだろうか。ただし自我が常に自由に行為しているとまではベルクソンは主張していない。心全体や人格全体――すなわち持続的な流れそのものの内にある自我――に身を委ねて同化してあるがままに決断し行為しているその時に限って、自我は真に自由であるのだとベルクソンは結論付けている訳である。

第二章　ベルクソンの主張の問題点

第一節　自我を自由に見える状態にしているもの

それではベルクソンの考えに対する私の指摘を始めよう。確かにベルクソンの主張する通り、自我と自我の行為が同化するものであり、自我の行為が自我によってのみ創造されているものであるならば、その場合に限っては疑う余地なく自我は真に自由に行為しているとは明言できる。そのとき自我は自我そのもののみによって決断し行為していると言えるのだから。ところがベルクソンの論証を微に入り細を穿って閲してみれば――自我が自我そのもののみによって決断し行為しているとまでは保証されていないことに我々は気付くだろう。換言するに、自我を自由であると思われる状態にしているものが自我そのもののみである保証は、その実どこにも提示されていないのである。

> 「そして、この内的状態の外的な表れがまさしく自由行為と呼ばれるものだろう。なぜなら自我のみがその作者であったし、その外的な表れは自我全体を表現するのだから（Et la manifestation extérieure de cet état interne sera précisément ce qu'on appelle un acte libre, puisque le moi seul en aura été l'auteur, puisqu'elle exprimera le moi tout entier）」[29]

しかし「自我のみがその作者であった」ことを――即ち自我のみが自我の自由行為の作者であったことを裏付ける確たる根拠は皆目提示されていない。当然ながら自我そのものを自由に見える状態にしているものが自我そのもののみでなければ、自分のみで自分を自由に見える状態に出来ていない自我はそのとき自由であるとは言えないが、ベルクソンの呈した規律に厳格に従うとするならば、「自我そのものを自由に見える状態にしているものは自我そのもののみである」という表現が成り立つ可能性の存在する余地がそもそもないのである。何故ならば持続的な流れそのものの内にある自我そのものを分析しなければ、自我そのものがみが自我そのものを自由な状態にしているのか否かを判断できない筈であ

るにも拘らず、第一章第二節の結論にある通り自我そのものを捉えるには持続的な流れそのものの内にある自我そのものに身を委ねてありのままに感じるしかないのだから。結局のところ自我そのものがのみが自我そのものを自由に見える状態にしているのか否かは分析できないはずなのだ、自我そのものを分析することはベルクソン自身によって厳に禁じられていたはずなのだ！　畢竟するに自我そのものを自由な状態にしているものが自我そのものがのみであるとは断定できないので、自分のみで自分を自由な状態に出来ていない可能性のある自我そのものは自由であるとは言い切れない。

自我と自我の行為は同化するものであり、自我の行為が自我によってのみ創造されているものであるならば、そのとき自我は自由に行為しているとベルクソンは主張した。ところでそもそも自我と自我の行為が同化する状況とはどのような状況なのだろう？　ここにおいてこそ我々は真に眉を顰(ひそ)めるべきである。有態に言えば自我そのものと自我の行為とが同化し得るなどと考えてしまっている事が、ベルクソンの根本的かつ致命的な間違いなのである。何故ならば自我そのものと、決断することや意志すること等といった自我の行為は、同化し得ないほどに本質的に異なる全くの別物なのだから。そして自我そのものと決断することや意志すること等といった自我の行為が本質的に明確に異なる事実を即座に了解するためには次の一言で事足りる――自我は感じるものだが決断することや意志すること等といった行為は感じるものではない、というこの一言で。つまり自我そのものと同化する権利があるのは感じるものである感覚や感情ぐらいのもので、行為の類はそもそも自我と同化する権利を持ち得ない。果してベルクソンは行為の主体と行為それ自体とを無意識的に――あるいは狡猾にも意図的に混同してはいないだろうか。兎にも角にもこのことは何度繰り返されても繰り返され過ぎることはないだろう――自我そのものと自我の行為は同化し得ないほどに本質的に全くの別物なのである。

この際あえてベルクソンに最大限の好意を呈するならば、自我そのものと自我の行為が直接同化し得るとまでは彼は主張していないとも解釈できるかも知れない。「行為は、それが関係する動的系列が根底的自我と同化する傾向があればあるほど、その分だけより自由になるだろう（l'acte sera d'autant plus libre que la série dynamique à laquelle il se rattache tendra davantage à s'identifier avec le moi fondamental）」[30]という第一章第二節の引用をつらつら閲すれば、自我の行為そのものが自我と直接同化した場合について彼が述べているというよりは、自我の行為と自我の動的系列だけが同化した場合につい

て述べているとも解釈できるのだから。そこで自我の行為と自我の動的系列が同化する時こそ自我は自由であるという事が、ベルクソンの主張せんとするところであると仮定しよう。では「自我の行為と自我の動的系列が同化する」状況とは果して如何なる状況なのか。動的系列とは言わずもがな今現在という持続的な流れを意味するものである為に、自我の行為と自我の動的系列が同化すれば両者は進行しつつある今現在のうちにのみ存在することになる。即ち自我と自我の行為とが完全に同時的であるならば、そのとき自我の行為の作者は自我自身である筈だとベルクソンは考えたいに違いない。

しかし果して二つのものが同時的に進行しているという理由から、両者の確たる関連性までが直ちに導けるものだろうか。例えば日の出と同時に雨が降り始め、日没と同時に雨が降り止んだとしよう。このとき確かに太陽と雨とは同時的に進行してはいるものの、両者が同時的に進行しているからという理由によって、太陽と雨に何かしらの関連性が生じている筈だなどと我々は思い做してよいだろうか。――否、否、三たび否。二つのものが同時的に進行していようが、それだけで両者に何かしらの関連性があるなどとは断定できない。自我の行為と自我の動的系列が同化するものであるとしても、そのとき自我の行為と自我との間に直ちに確たる関連性が生じるとまでは断じて断じて言えないだろう。

それでもなお前述の通りベルクソンは、自我の行為と自我の動的系列が同化しておれば「実際、自由な決断は心全体から出る（C'est de l'âme entière, en effet, que la décision libre émane）」[31]と飽くまで主張している。ところが心全体という自我から、全くの別物である決断することや意志すること等といった行為が生まれる事を裏付ける確固たる根拠は一切提示されていない。そしてこれこそまさしく因果律に関わる問題なのである。自我という原因から、全くの別物である行為という結果が生ずることを証明するためには、何よりも先に原因から結果が生ずるという因果律の存在そのものを証明しなければならないのだから。ところが先達てベルクソン自身が舌鋒鋭く否定していたものこそ、他ならぬその因果律の正当性だったではないか！[32]

この際ともすると不撓不屈のベルクソンは以下のように主張するかも知れない。自我が自我の行為と動的系列において同化しておりさえすれば、そこには今現在という持続的な流れだけが存在することになり、過去と未来という時間的前後関係が消滅するために、前における原因と後における結果によって織り成される因果律はそのとき問題にはならないのだと。――しかしそうであるとしても結局のところ先刻の太陽と雨の関係性と同じこと。時間的に前後がなく今現在しか存在しない状況下であろうとも、「自我」と「自我の

行為」が全くの別物である以上、その今現在のうちにある異なる両者が懇ろに関連しているなどとは断定できない。それでもなお自我の行為が全くの別物である自我のみによって生み出されていると主張したいのならば、自我から自我の行為が生み出される根拠を巍々堂々と提示する義務があるだろう。ところがベルクソンは自我と自我の行為の曖昧模糊とした同化を徒(あだ)に唱えるばかりで、残念ながらその義務を一向に果そうとはしなかった。

畢竟するに持続的な流れそのものの内にある自我に身を委ねて同化してありのままに決断し意志し行為していると仮定しても、その行為が自我そのもののみから生み出されている事を示す明確な根拠が存在しない以上、決断することや意志すること等といった自我の行為が自我のみによって生まれたものであるとは断定できず、それゆえ決断することや意志すること等といった自我の行為が自我の自由のうちにあるとは言い切れないのである。

第二節　自我は本当に表現され得ないのか

ひょっとするとここで読者は私に謗難を加えてくるかも知れない。持続的な流れそのもののうちにある自我を持続的な流れそのものを持たない表現に真に置き換えることは不可能であると第一章第二節で結論づけた筈なのに、自我の意志や自我の行為や自我の自由に関して云々と表現している冨増は、結局のところ持続的な流れのうちにある自我を持続的な流れを持たない表現に置き換えて分析してしまっているではないかと。言ってしまえばその様に指摘したがる読者は気付いていない——持続的な流れのうちにある自我それ自体と、「持続的な流れのうちにある自我」の性質それ自体とを、すっかり自分が混同してしまっている事に！　持続的な流れのうちにある自我それ自体が何であるかは真に表現できないし分析できないが、「持続的な流れのうちにある自我」の性質それ自体が何であるかは表現し得るし分析し得る。そして自我の行為や自我の自由不自由の類もまた表現されうる「持続的な流れのうちにある自我」の性質それ自体なのである。ベルクソンにも反論する権利がない事は判然としていよう——何となれば彼は「一言で言えば、もし自我から、そして自我のみから出るあらゆる行為を自由と呼ぶのが適切ならば、我々の人格の刻印を帯びた行為は真に自由である（En un mot, si l'on convient d'appeler libre tout acte qui émane du moi, et du moi seulement, l'acte qui porte la marque de notre personne est

véritablement libre)」[33]と行為や自由について表現することで、行為や自由というものが、表現され得ない持続的な流れのうちにあるものそれ自体ではなく、表現されたり分析されたりしうる性質それ自体である事を、確かに身を以て認めてしまっているのだから。

まことに私は言うのだが――持続的な流れのうちにある自我それ自体と「持続的な流れのうちにある自我」の性質それ自体は同一ではない。持続的な流れのうちにある自我それ自体を持続的な流れのうちにない表現に真に置き換えることは不可能であっても、持続的な流れのうちにある自我それ自体と「持続的な流れのうちにある自我」の性質それ自体は同一ではなく、「持続的な流れのうちにある自我」の性質それ自体は持続的な流れのうちにあるわけではないので、「持続的な流れのうちにある自我」の性質それ自体なら表現されることも分析されることも可能なのである！

無論その際に表現されたり分析されたりするものは、自我そのものという全体では断じてない。されど対象そのものという全体を悉皆把握しなくとも、我々は対象の性質それ自体を検めるだけで十分に対象の性質という部分について把握する権利を勝ち得ることになるのである。ある者が人を殺した際、その殺人者が何者であるかを悉く真に捉えることなどしなくとも、その殺人者が殺人を犯したという性質を孕んでいるという事実については、我々は寸毫も尻込みすることなく言明する権利がある事を今しも思い起して頂きたい。ある対象の一部の性質を知るために、対象そのものの全貌までをも完全に把握する必要などはそもそも皆目ないのである。

それでもなお自我そのものを分析する事がベルクソンにより禁じられていた事実に固執して、あるもの自体を直接分析することなくそのあるものの性質それ自体を分析したり表現したりする事など出来るものかと弁駁しようと試みる読者もいるかも知れないが――私は莞爾として然りと応えよう。そのものの外部の世界を検討することで、間接的にそのものの内部を分析し表現すればよいだけの事なのだから。ヤンキースタジアムのバッターボックスにイチローが立っていない場合、イチローという人物そのものを直接捉えて分析しなくとも、「ヤンキースタジアムのバッターボックスにいない」という性質がイチローにあると分析でき表現できる事を考えれば、あるもの自体を直接捉えて分析せずともその「あるもの」の性質それ自体を分析したり表現したりできる事が容易に理解できるだろう。ある対象の性質を分析したり表現したりする為には、対象そのもの全てを直接捉えて分析する必要までは全くないのである。

第三章　自我は自由と言えるのか

第一節　自我は自由ではない

本論文の第一章において自我の自由を擁護するベルクソンの論理展開を汲み上げて、第二章においてそのベルクソンの論理展開の問題点を微に入り細を穿って露にしてきた我々は、少なくとも現時点で次のように断言できる――ベルクソンの論理展開は自我の自由を擁護するには甚だもって不十分であると。されどこの事実は自我が不自由であるという事を即座に意味するものでないのみならず、自我が自由であると論証できない事をも即座に意味するものではない。単にベルクソンの編み上げた自我に纏わる論理展開では、自我の自由不自由に関して確定的な結論は導出できないと判明しただけなのである。「自我が意志や願望を自ら選択する力を秘めているか否かを突き止めること」[34]を本論文の最終目的に据えた我々は、自我の自由を庇護しようとしたベルクソンへの弁駁に快哉(かいさい)を叫ぶことなく、自我が意志や願望を自ら選択する力を秘めているか否かを突き止めるべく、今しばらく歩武を緩めず勇往邁進せねばなるまい。

とはいえ自我が自由であるか否かを突き止めるため、全くの一から汲々と準備に奔走しなければならない訳ではない。序章と第一章と第二章を着々と経てきた我々は、自我の自由に纏わる確乎たる諸事実を折に触れて見出してきた筈なのだから。それらの諸事実の孕む意義を注意深く把握している読者なら、むしろ目的を達成するために新たに成すべき作業がさほど多くないことに心付くだろう。ベルクソンのレシピを試みた過程で食材の下拵えは十二分にできている――あとは正しく調理しなおしさえすればそれでよい。

さて、そもそも我々が自我の自由に関するベルクソンの主張を繙(ひもと)いて、その正当性をこれまで具(つぶさ)に検証してこなければならなかった理由を今しも思い起して頂きたい。我々が二つの章にわたって矯(た)めつ眇(すが)めつベルクソンの論理展開を閲してきたのは、ひとえに序章において披瀝した自我の不自由を意図する私自身の主張が、ともすると自我の自由を掲げるベルクソンの主張によって覆されかねないと危惧したからであった。それゆえベルク

ソンによる自我の自由の論証が暗礁に乗り上げざるを得ない事実が判然とした今、自我の不自由を意図する私自身の主張が諸手を挙げて安堵の破顔を輝かせる権利を与えられてよいようにも思われるかも知れないが――直ちにそう決めてかかるのは早計だろう。本論文の第二章で検討した通り、確かにベルクソンの論理展開では自我の自由の証明にまでは至り得ない。されど自我の自由を導こうとする過程で披露されたベルクソンの発想には疑い得ないほど強力な要素も存在したのだから、その疑い得ない要素が自我の不自由を意図する私自身の主張を脅かし得るか否かを検証せずに、自我の不自由を声高に叫囂(きょうごう)するわけには行かないのである。

そしてベルクソンの紡ぎ出したその疑い得ない要素こそ、「自我は真に表現され得ないものであると同時に、真に分析され得ないものでもある」[35]という事実に他ならない。煩を厭わず復習するが、「流れつつある持続的なものを空間的なもので真に表現することはできない」[36]ということは疑い得ず、「自我は今現在というこの持続的な流れそのもののうちにある」[37]ということもまた疑い得ず、「自我が真に表現され得ないものである以上、自我はまた真に分析され得ないものでもある」[38]ということもまた疑い得ない事実であったのだから、「自我は真に表現され得ないものであると同時に、真に分析され得ないものでもある」という事実が疑い得ないと導出できた。それゆえ序章において予告した通り、ベルクソンは「自我そのものを表現したり分析したりすることを厳に禁ずる」[39]ことになるわけである。自我そのものを表現したり分析したりすることが禁じられて然るべきならば、自我の不自由を意図する私自身の主張がその禁忌を犯している可能性も否定できない。幽玄きわまる自我の森での我々の永きにわたった逍遥は、ひとえにこの眇(びょう)たる一点を明らかにするためにこそ必要だったとすら言える。

それでは結局のところ、自我そのものを表現したり分析したりすることが禁じられて然るべきと分かった今、自我の不自由を意図する私自身の主張は何かしらの損害を被ることになるのだろうか。自我の不自由を意図する私自身の主張を今一度ここに召喚し、アテナの青々と輝く慧眼(まなこ)に誓って偏頗(へんぱ)なき裁断を下しにかかろう。

> 「何かしらの意志が自我のうちに宿される時、その意志を自我のうちに宿らせたものが、未だそれを宿していない自我それ自体である筈がない」[40]

さて、このごく短い文章において私は確かに自我に関して言及している。自我に関して

分析して自我に関して表現しているとさえ言ってよい。それゆえこの隻句は自我そのものを表現したり分析したりしてはならないという禁忌を犯していると言えるのだろうか？あれほど強固であれほど疑い得ないと思われた私の愛しい一文証明は、邪なものとしてアテナの聖なる山羊革盾に儚(はかな)くも払い除けられねばならないのだろうか？――否、答えは明確に否である。まことに私は言うのだが、件の私の一文証明は自我に関して分析し自我に関して表現してはいるものの、自我そのものを分析し自我そのものを表現しているわけでは断じてない！　瑣末な差異だと侮るなかれ、「そのもの」と「関するもの」とでは実際に天と地ほどの懸隔があるのだから。一体どこの誰が「エッフェル塔」と「エッフェル塔の写真」との差異が瑣末だなどと思うだろう――どこの誰が「エッフェル塔」に登るなと言われて「エッフェル塔の写真」に登るなと言われているなどと思うだろう？　まことに「そのもの」と「関するもの」との間には看過し得ないほどの開きがあるのである。

それでもなお件の隻句が自我そのものを分析したり表現したりしているように思えてならない読者も存在するに違いない。何しろ件の文章には「自我」という言葉が複数登場するばかりか、「自我それ自体」というより直接的らしく見える言葉さえ憚ることなく閃いているのだから。それではこのさい思い切って「自我」という語を未知数「X」に置き換えてみたらどうだろう。件の一文証明がいかに「自我」という存在そのものに依存していないかを判然とさせるために。

> 「何かしらの意志がXのうちに宿される時、その意志をXのうちに宿らせたものが、未だそれを宿していないXそれ自体である筈がない」

文章は「自我」に関する文章ではなく未知数「X」に関する文章に切り替わったものの、構造自体は以前のものと変わっていない。そして言わずもがな未知数Xとは未知のものである。ところが未知数Xそのものが何であるかを知らずとも、我々はこの文章を秋毫の苦もなく有りのままに理解し諾(うべな)い得る事に気付くだろう。そうなのだ――我々は未知数Xそのものが何であるかは微塵も知らずとも、その何物かがXに代入される場合にはXがこの文章の示す特定の性質を持つと結論付けることが出来るのである。兎にも角にもこの文章はXに代入される「何かしら」それ自体には触れてさえいないのだから、当然その「何かしら」それ自体を分析してもいなければ表現してもいないことが了解いただけるだろうか。――翻って自我に関する件の一文証明を再読すれば今度ばかりは首を縦に振らないわ

けにはいかないだろう、件の一文証明は自我そのものを分析してもいなければ自我そのものを表現してもいない。何度繰り返しても繰り返され過ぎることはないが——件の隻句は唯に自我の性質それ自体を分析し、唯に自我の性質それ自体を表現したまでなのである。そして真に表現されたり真に分析されたり出来ないのは自我それ自体であって、自我の性質それ自体では断じてないという瞭然たる事実については、本論文第二章の第二節「自我は本当に表現され得ないのか」において既にくだくだしく検証した通り。

見るがよい——既にしてアテナは此方へ向かってなよらかな微笑みを揺蕩(たゆた)わせつつ、醜怪なゴルゴンの首を嵌め込んだ山羊革(アイギス)盾を事も無げに伏せている。もはや我々は寸毫も躊躇うことなく高らかに唱えてよいだろう——「何かしらの意志が自我のうちに宿される時、その意志を自我のうちに宿らせたものが、未だそれを宿していない自我それ自体である筈がない」のだと。

しかるにこの際あえて一入(ひとしお)念を入れるなら、件の隻句にはそこばくの注意を払うべき箇所があることを申し上げておかねばなるまい。それこそは「意志が自我のうちに宿される」という表現に関するものである。正直に告白するならば、自我のうちに意志が出現する過程については現段階では判然としていない。意志とは自我の外から自我の内へ「宿される」類のものかも知れないし、植物が成長するように自我の内で「生じる」類のものなのかも知れない。それゆえ意志が自我のうちに「宿される」という表現が、厳密な意味で適切であるか否かは判断しかねるものである。加えて自我のうちに意志を出現させる能動者の存在をより水際立たせる意図も相俟って、あえて「意志が自我のうちに宿される」という表現を一種の比喩として採用しているだけであり、必ずしも「宿される」という表現に殊更拘泥すべきでないことは断っておく。

それにつけても自我のうちに意志が存在するようになるその瞬間を、意志が「宿る」と表現すべきなのか、意志が「生じる」と表現すべきなのか、意志が「出現する」と表現すべきなのか、或いはそれ以外の言葉で表現すべきなのかは、有態に言ってしまえばこのさい如何でもよい。ともかく意志というものが自我のうちに「宿る」ものであれ「生じる」ものであれ「出現する」ものであれ何であれ、自我のうちに特定の意志が存在しない状況から存在する状況に変える意志が、未だ自らのうちに意志を所有していない自我それ自体にない事に変わりはないのだから。そうとも、自我のうちに意志を存在させようとする意志自体を、意志を所有する前の自我は当然ながら持ち得ないのだ。即ち自我のうちに特定

の意志が存在しない状況から特定の意志が存在する状況に変える意志が自我それ自体にない以上、少なくとも自我は意志を自ら望んで決定できていない存在なのである。究竟、自ら意志を選択できていない自我は自由であるとは呼び得ない。

第二節　自我の不自由と決定論

さて前節の末尾において我々は漸っと、自ら意志を選択できていない自我は自由であるとは呼び得ないという結論に漕ぎ着けた。自我が意志や願望を自ら選択する力を秘めているか否かを突き止めることが本論文の最終目的であった事を思い起せば、我々は目くるめく長旅に憔悴しきった四肢を今しもあれ心置きなく休めてよい。それでも私がこのささやかな節を吝嗇せずに添えたのは、我々が苦心惨憺して紡ぎ出した結論が無関係の決定論者に悪用されないよう前もって警告しておくためである。自我は自由ではないという結論から、自我の未来の様相は予め宿命付けられているのだという決定論が濫りに惹起されないよう、あくまで囂しく警鐘を鳴らしておくためである。

我々は専ら自我が不自由であると結論付けただけであり、自我の未来が予め定められているとまでは断じて断じて結論付けていない。一瞥すれば「自我の不自由」から必然的に「自我の決定論」が導き出されるようにも思われるかも知れないが、前者と後者との間には思いのほか甚だしい距離が横たわっている。まことに私は言うのだが、本論文により我々が杲々たる白日のもとに曝したのは「自我の意志を決定しているのは少なくとも自我それ自体ではない」という事実だけであり、自我の意志が何物によって決定されているかまでは夢聊かも暴いていない。——それゆえ例えば偶然や混沌と呼ばれる類の無秩序的な作用によって、自我の意志が闇雲に決定されている可能性も依然として残されているわけである。言わずもがな闇雲に決定されているものは予め決定されているものとは等しくない。そうであるとすればそのとき自我の意志は決定論に統べられているとは言えないだろう。それゆえ自我が不自由であると疑いなく結論付けられたからといっても、それだけで自我の意志が鞠躬如として決定論に服従しているとまでは、必然的に断定されねばならないわけではないのである。

右に左に翻弄するようで仄かに心苦しいが、なにも私は「自我の決定論」それ自体を唾棄すべきものとして糾弾しようとしているわけではない。唯に本論文によって導き出され

た「自我の不自由」という結論から必然的に「自我の決定論」を導けると考えるのは、およそ荒唐無稽な妄想であると念を押したいだけなのだから。自我の意志は決定論に統べられているかも知れないし、統べられていないかも知れない。それらを如実に暴きたいのであるならば、本論文で見出された「自我の不自由」という事実のみでは不十分だと釘を刺しておきたいだけである。

結語

何かしらの意志が自我のうちに宿される時、その意志を自我のうちに宿らせたものが、未だそれを宿していない自我それ自体である筈がない――この確信から勇躍して探究の壮途についた我々は、ベルクソンの世界を巡り巡って再び元の確信へと舞い戻ってきた。より詳(つまび)らかに回想するならば、自我には意志や願望を自ら選択する自由がないと確信した我々は、自我を表現したり分析したりすることを禁ずるベルクソンに仮初(かりそめ)ながら窘められこそしたものの、自我を表現したり分析したりすることを禁じられても自我の不自由が成立する道理を如実に暴き、自我には意志や願望を自ら選択する自由がないとの確信を再び心に奪還したわけである。即ち結果的には本論文で検証されたベルクソンの主張は「自我は自由であり得るか」という問題を暴くための踏み台となったとも言えるので、ややもすると「ベルクソン研究」という主題と「自我は自由であり得るか」という副題とが倒錯していると感じられるかも知れない――とりわけ故人の没年を好んで墓石に刻みたがる類の者にとっては。しかし結果的には死ぬ宿命にあると悟りながらも我々が日々の営みを怠らないのは、死という結果よりもむしろ生きるという過程こそが重要であると認識しているからではないだろうか。私ならば没年という瑣末な結果を刻む暇があるならば、むしろ己がどう生きたかという過程をこそ己(おの)が墓標に刻まれたいと希(こいねが)う。梯子を用いたおかげで高みに登りつけたのであるならば、ウィトゲンシュタインの如くぞんざいに投げ棄てたりはせず[41]、その武勲赫々(かっかく)たる梯子に対して最大限の敬意を須(すべから)く払うべきだろう。

事実、ベルクソンの主張を検証する過程で見出された諸事実が本論文の肝である。それゆえお節介は承知のうえで今一度その検証過程を掻い摘んで振り返ろう。まずベルクソンは流れつつある持続的なものは空間的には真に表現され得ない事実を発見し、自我もまた流れつつある持続的なものであるがゆえ、自我は真に表現され得ず真に分析され得ない筈だと展開した。自我は真に表現され得ないものであり真に分析され得ないものであるというこの発見は、哲学史上で未来永劫消えない鋼の足跡となるだろうと思われるほど重く大きく揺るぎない――自我の自由を救済するためそこから荒唐無稽な飛躍をしたことは超度(おちど)だが。そうなのである、ベルクソンには大きく二つの超度があった。一つ目の超度は「自

我そのもの」と「自我の行為」とが同化し得ると考えたことである。進行しつつある持続的な自我に身を委ねれば進行という今現在だけが存在することになるため、「自我そのもの」と「自我の行為」とが同化することになる筈だとベルクソンは考えた。自我の行為が自我そのものと同化しているのであるならば、確かにそのとき自我は自由に行為していることになる。ところが「自我そのもの」と「自我の行為」は同化し得ないほどに本質的に異なる全くの別物でしかない。たとえ両者が全く同時的に存在するとしても、全くの別物である両者に関連がある証拠は何ら提示されていないのだから、ベルクソンの手法では自我の自由が導けていないことが判然としたのである。――そしてベルクソンの二つ目の超度こそ「自我そのもの」と「自我の性質そのもの」とを混同したことに他ならない。自我が表現され得ず分析され得ない事実を頻りに強調することで、自我が不自由であることを分析される道を巧みに寸断しようとベルクソンは試みた。確かに流れつつある持続的なものである「自我そのもの」は真に表現され得ず分析され得ないものである。しかし「自我の性質そのもの」は流れつつある持続的なものではないために、自我の自由不自由などといった「自我の性質そのもの」に関しては分析することも表現することも我々は寸毫も憚る必要はない。それゆえ我々は再び堂々と宣言することができたのである――何かしらの意志が自我のうちに宿される時、その意志を自我のうちに宿らせたものが、未だそれを宿していない自我それ自体である筈がないのだと。

論理の縦糸と誠実の横糸とを丹精を尽して重ね続けた結果、自我は意志を自ら選択し得ないというおどろおどろしい事実が織り上がった。されど絶望しないでもらいたい――我々は単に自由に意志を選択できないだけであり、我々の未来までもが黝(かぐろ)く艶めく桎梏(しっこく)で雁字搦めにされていると決まった訳ではないのだから。私は自我の意志を自我自身が決定していない事は暴いたが、自我の意志を決定しているものが何であるかまでは暴かなかった。限られた時のなかで身に余る大冒険に勇み立つほどには、私は愚直でもなければ勇敢でもなかったからである。

自我の自由は死んだ。しかしこのさいあけすけに胸襟を打ち開けば――私は自我の不自由を謳う件の一文証明が疑い得ない真実であるとまでは依然として思えない。件の隻句を紡ぎあげた当初は確かにそれが疑い得ない真実であるはずだと確信したが、自我に纏わるベルクソンの驚愕すべき発想に触れたことにより、あれほど疑い得ないものと思われた私の確信は玉響(たまゆら)ながら覚束なげに揺らいだのだから。明確に疑い得ないと思い做されていた

ものが、別の観点を取り入れることにより、矢場(やにわ)に疑い得るものと見做されざるを得なくなったという経験に打ち拉がれた今となっては、もはやいかなる確信も確信に足るものであるとは思われない。今そこにある確信が覆されかねない状況に陥る可能性が依然としてそこにある。序章において私は科学を「予定外の現象を新たに観測する度に、修正に次ぐ修正を余儀なくされてきた不完全なもの」[42]であると嘲笑したが――今まで存在しなかった観点を新たに取り入れる度に、修正に次ぐ修正を余儀なくされてきた哲学もまた、科学と同様に不完全なものではなかったか。これこそまさに本論文の執筆を通じて私が学んだ最大の真実である。

それゆえ自由の庇護者をもって自任する誇り高き読者は、どうか軽々しくその燦爛たる希望を棄て去らないでもらいたい。今そこに自我が自由ではないという疑い得ない確信があるとしても、その確信がやがて確信でなくなる可能性までは決して潰えたわけではない筈である。今そこで自我の不自由を吹聴している小癪な操人形(マリオネット)の手先足先から、本当に無数の繰糸が活溌溌地(はっち)に躍り上がっているのか否か。それを見極めるために払われる努力が報われるか否かは定かでないが、自由のために不撓不屈の意志をもって汗もしとどに粉骨砕身する姿が、いかなるものにも増して美しいことだけは疑い得ない。

（了）

参考文献表

1. Henri Bergson, *Essai sur les données immédiates de la conscience*, Quadrige: Presses universitaires de France, 2007.
2. Henri Bergson, *La pensée et le mouvant*, Bibliothèque de Philosophie Contemporaine, Presses universitaires de France, 1946.
3. Henri Bergson, *L'évolution créatrice*, Bibliothèque de Philosophie Contemporaine, Presses universitaires de France, 1962.
4. Henri Bergson, Durée et simultanéité *: À propos de la théorie d'Einstein*, Quadrige: Presses universitaires de France, 1992.
5. Thomas Hobbes, *Leviathan*, ed. Richard Tuck, Cambridge: Cambridge University Press, 1996.
6. アンリ・ベルクソン（中村文郎訳）『時間と自由』岩波文庫、２００１年。
7. アンリ・ベルクソン（河野与一訳）『思想と動くもの』岩波文庫、１９９８年。
8. アンリ・ベルクソン（松波信三郎、高橋允昭訳）『ベルグソン全集４　創造的進化』白水社、１９６６年。
9. アンリ・ベルクソン（鈴木力衛、仲沢紀雄、花田圭介、加藤精司訳）『ベルグソン全集３　笑い　持続と同時性』白水社、２００１年。
10. トマス・ホッブズ（水田洋訳）『リヴァイアサン（二）』岩波文庫、１９６４年。
11. 石島紀之『中国抗日戦争史』青木書店、１９８４年。
12. ルートヴィヒ・ウィトゲンシュタイン（野矢茂樹訳）『論理哲学論考』岩波文庫、２００３年。
13. ジル・ドゥルーズ（宇波彰訳）『ベルクソンの哲学』法政大学出版局、１９７４年。

註

---

[1] Thomas Hobbes, *Leviathan*, ed. Richard Tuck, Cambridge: Cambridge University Press, 1996, p. 146.
[2] 石島紀之『中国抗日戦争史』青木書店、１９８４年、６３頁。
[3] Henri Bergson, *Essai sur les données immédiates de la conscience*, Quadrige: Presses universitaires de France, 2007, p. 79.
[4] Henri Bergson, *Essai sur les données immédiates de la conscience*, Quadrige: Presses universitaires de France, 2007, p. 67.
[5] Henri Bergson, *L'évolution créatrice*, Bibliothèque de Philosophie Contemporaine, Presses universitaires de France, 1962, p. 305.
[6] Henri Bergson, *La pensée et le mouvant*, Bibliothèque de Philosophie Contemporaine, Presses universitaires de France, 1946, p. 205.
[7] Henri Bergson, *La pensée et le mouvant*, Bibliothèque de Philosophie Contemporaine, Presses universitaires de France, 1946, p. 213.
[8] Henri Bergson, Durée et simultanéité *: À propos de la théorie d'Einstein*, Quadrige: Presses universitaires de France, 1992, p. 47.
[9] Henri Bergson, *Essai sur les données immédiates de la conscience*, Quadrige: Presses universitaires de France, 2007, p. 166.
[10] Henri Bergson, *La pensée et le mouvant*, Bibliothèque de Philosophie Contemporaine, Presses universitaires de France, 1946, p. 181.
[11] Henri Bergson, *Essai sur les données immédiates de la conscience*, Quadrige: Presses universitaires de France, 2007, p. 94.
[12] Henri Bergson, *Essai sur les données immédiates de la conscience*, Quadrige: Presses universitaires de France, 2007, p. 93.
[13] 本論文、６頁。
[14] Henri Bergson, *La pensée et le mouvant*, Bibliothèque de Philosophie Contemporaine, Presses universitaires de France, 1946, p. 166.
[15] Henri Bergson, *Essai sur les données immédiates de la conscience*, Quadrige: Presses universitaires de France, 2007, p. 96.
[16] Henri Bergson, *La pensée et le mouvant*, Bibliothèque de Philosophie Contemporaine, Presses universitaires de France, 1946, p. 181.
[17] 本論文、６頁。
[18] Henri Bergson, *Essai sur les données immédiates de la conscience*, Quadrige: Presses universitaires de France, 2007, p. 165.
[19] Henri Bergson, *Essai sur les données immédiates de la conscience*, Quadrige: Presses universitaires de France, 2007, p. 93.
[20] Henri Bergson, *Essai sur les données immédiates de la conscience*, Quadrige: Presses universitaires de France, 2007, p. 133.
[21] Henri Bergson, *Essai sur les données immédiates de la conscience*, Quadrige: Presses universitaires de France, 2007, p. 108.
[22] Henri Bergson, *Essai sur les données immédiates de la conscience*, Quadrige: Presses universitaires de France, 2007, p. 156.
[23] Henri Bergson, *Essai sur les données immédiates de la conscience*, Quadrige: Presses universitaires de France, 2007, p. 152.
[24] Henri Bergson, *Essai sur les données immédiates de la conscience*, Quadrige:

Presses universitaires de France, 2007, p. 137.

[25] Henri Bergson, *La pensée et le mouvant*, Bibliothèque de Philosophie Contemporaine, Presses universitaires de France, 1946, p. 174.

[26] Henri Bergson, *Essai sur les données immédiates de la conscience*, Quadrige: Presses universitaires de France, 2007, pp. 125-126.

[27] Henri Bergson, *Essai sur les données immédiates de la conscience*, Quadrige: Presses universitaires de France, 2007, p. 129.

[28] Henri Bergson, *Essai sur les données immédiates de la conscience*, Quadrige: Presses universitaires de France, 2007, p. 130.

[29] Henri Bergson, *Essai sur les données immédiates de la conscience*, Quadrige: Presses universitaires de France, 2007, pp. 124-145.

[30] Henri Bergson, *Essai sur les données immédiates de la conscience*, Quadrige: Presses universitaires de France, 2007, p. 126.

[31] Henri Bergson, *Essai sur les données immédiates de la conscience*, Quadrige: Presses universitaires de France, 2007, p. 125.

[32] 本論文、１５－１６頁。

[33] Henri Bergson, *Essai sur les données immédiates de la conscience*, Quadrige: Presses universitaires de France, 2007, p. 130.

[34] 本論文、６頁。

[35] 本論文、１３頁。

[36] 本論文、１０頁。

[37] 本論文、１２頁。

[38] 本論文、１３頁。

[39] 本論文、６頁。

[40] 本論文、５頁。

[41] 「梯子をのぼりきった者は梯子を投げ棄てねばならない」（ルートヴィヒ・ウィトゲンシュタイン（野矢茂樹訳）『論理哲学論考』岩波文庫、２００３年、１４９頁）

[42] 本論文、５頁。